

保育者として成長して行くこと

— 学生たちとのかかわりから —

梅田 優子

はじめに

私が所属しているのは、一学年の定員五十人、学生の九割以上が保育職に就いていく幼児教育科である。私は保育内容関係の授業と、一・二年次の保育所実習の担当をしている。

社会人入学者も数名いるが、多くの学生は高校を卒業してすぐにはいつてくる。短大生活の二年間は、それまでも現在も「育まれる存在」である。彼らが、同時に「育む存在」としての構えや姿勢を見いだしていく始まりなのだと思う。養成校でできることは僅かなことと思うが、その本当に最

初のところにいる学生達との、特に実習を巡るやりとりの中で、保育の専門家として求められる姿勢や内容について、私自身実感させられることも多い。

*

学生は、実際に子ども達と触れ合うことのできる実習を楽しむに一方で大きな不安と緊張を伴っていることを、個人面談の中で実感する。特に一年次の実習はそうで、「子ども達が受け入れられるか」「子どもと遊べるか」そして「実習園の先生方とうまくコミュニケーションが取れるか」など、「近づいてくるほどに不安になる」と言う。どの学生たちも、子ども達のことをできるだけ理解し、共に楽しい時間を過ごしていきたいという思いは共通である。

しかし、当然のことであるが、学生一人一人は

本当に一人一人の個性がある。それぞれが固有のプロセスを通じて成長していくが、それまでほとんどかかわる経験のなかった乳幼児期の子ども達に出会った際の在り方に、幾つかの傾向性も感じられる。幾つか事例を取り上げてみたい。

実践化―動き・かかわり―への

課題を強く感じていく場合

学生たちの中にはどちらかといえば、子どもや保育者をよく観察して、その世界を理解していくことから、どう自分が動いていったらよいかを考えたたり動いたりしていこうとする傾向性をもつ者もいる。こうした学生たちは、子ども同士がどうかかわっているのか、どういうふう遊びが動いていくかなど、子どもの繰り返る世界に驚きをもちつつ、感じたり学んだりしていることが、実習日誌などから伝わってくる。

たとえば、「四歳児になるとイメージを共有し
あいながら仲間とともに遊ぶ時間が多いと思っ
た。ストーリーは短く、遊びのテーマは次々と変
わっていったが、その度イメージを共有しながら
仲間との遊びを楽しんでいたようだった。そし
てイメージの伝わり具合が遊びを変えていくこと
につながるように感じた」(四歳児クラスでの実
習生)や、「おだんご母さんの役になって、お団
子づくりをしました。大きな穴の中に水を入れた
友だちを見て、明美ちゃんが『水すぐに無くなる
よ』と言いました。砂が吸い取ることを発見して
皆に伝えてくれたので『本当だ』と皆も気づい
て、容器のなかで団子の
たねを作るようになりま
した。子ども達同士で遊
び方を見つけ、進められ
てよかったと思いまし



た」(四・五歳児混合クラスで実習 などである。
その気づきの内容は、とくに一年次であること
もあって、素朴なものがほとんどであるが、自
なりに子どもと過ごした体験について思いを巡
らし子どもの行動のどんなところに自分は嬉しさや
驚きを感じていたのかを考える営みが起き始めて
いると、とらえていきたいと思っている。この学
生は、自分自身ができたりわかることであって
も、自分のペースで進めてしまうのではなく、子
ども達のできるところや発想を大切にしてわか
わっていききたいと思っていたという。そして「で
きるところとできないところを見極めて、子ども

を援助するのは難しかったです。できるところを簡単に手伝っていたり、できないで悩んでいたところは、どこまでが限界なのか、見ていたにも関わらずわかりませんでした。ずっと見ています『先生、どうしたの』と声をかけられます。きっと私の顔に笑顔がなかったからだと思います。子どものことを見ようとすると、目が真剣になってしまいます。一点ばかりに注目せず、他の子ども達も見ながら、明るく接していきたいです」とかわりの様子を記述している。

このように、子どもの遊びの行方を見ている状況や、どのように関わっていったらよいのかと思っているうちに機を逸してしまう状況などが窺える。このような学生たちは、基本的に「(傍観的に) 見ている」ことが中心となる在り方をしているようである。

*

このような学生に対して、実習園の先生方は子どもの様子に添おうとする姿勢を認めてくださると共に、「どんどん積極的に子ども達の中にはいつて遊びを楽しんでみたほうがよい」という内容のアドバイスをくださることが多い。これは、対象者として子どもを見るのではなく、共に生きる存在として感じつつ理解していくことの大切さの指摘なのだと思う。つまり「子どもに寄り添いながらその時を共に大事に生きる」というのは、手を出さずにいることばかりではなく(時にはそういう面も必要な場合もあると思うが)、おとなの側からも提案しながら子どもと共に作り上げていくものであること、何よりそうして遊びや関係を共に手探りし作り上げていくことの楽しさがあり、その中でこそ実感され理解されてくるも

のがあることの大切さを伝えてくださっているのだと思う。

しかし、このような学生たち自身は、子ども達と関わり、共に遊んでいるという思いを持ち、楽しかったと感じていることも多く、自分がどのように動くことが、[〃]積極的な子ども達とのかかわり[〃]を生み出す動きになっていくのかということ大きな課題として感じていく。

自覚化—思考・記述—への

課題を強く感じていく場合

また学生の中には、どちらかといえば自分から積極的にかかわり、その場を楽しいものに盛り上げつつ遊んだり、かかわったりしていく傾向を持つ者もいる。

このような傾向を持つ学生は、実習巡回の折に、保育場面での動きの様子を見ていると、子ども

もの言葉や表情・動作などに瞬時に共鳴するかのようになり、自分なりに応えている姿を目にすることが出来る。

ある男子実習生の例であるが、ある男児が何か訴えたいかのように身体を硬直させて自分に向かって立っている様子を感じると、「どうしたの」と問いかけながらその子どもの横に静かに身を寄せ座った。そしてずっと子どもの手を包むように取っていき、それによって子どもがふっと安心した様子を見せ、その実習生に話し出した。子どもの心を感じての、自然に湧き出てくるかのようなかかわりに、私は感嘆させられる。そうしたかわりが次から次へと展開され、また遊びにおいても自分が一緒になって、いろいろなことを提案したりして、楽しい場面を作り上げていく。子どもたちも魅力を感じて、その実習生に心を寄せていることが感じられた。

このように子ども達のかかわりに巻き込まれるようにして過ごす（関わっている瞬間には、実践しながら考え判断しているのだろうか）一日を終えたときに、この学生は、子どもの様子や自分のかわりに思いを巡らし、考えてみるということが困難な様子なのである。それは、実習日誌などの記述に現れてきており、たとえばその内容は、

「自由に遊ぶ」「給食を食べる」など一日の大きな流れの記述が中心になり、時間感覚も薄くなり、時刻を記入できない部分も出てくる。本人に聞くと「自分が何をどうしたか、どうかかわったか、あまり覚えていない」のだと言う。また「思い浮かぶ場面があってもそのかわりを全部言葉にしていくと長くなるし、どう関わったかは書けるのだけど、何を考えたらいいのかわからない」のだと言う。

この学生ばかりでなく、「自分のかわわりにつ

いて感じていることがあっても、それを書いていくのはたいへん」という学生は多く、一年次実習での記述化は難しい面も多く含んでいる。しかし、保育の専門家をめざすにおいては、自分の在り方がどうであったかを考えていく営みをしていこうとする姿勢を持つことも求められることであろう。

*

こうした学生に、実習園の先生方は、その場に応じた適切なかわわりや、子ども達の中に入りアイデア豊富に遊びに加わっていた姿勢を認めてくださることが多く、その上で、少しずつでも子どもの様子などを丁寧にとらえていく必要のあることをアドバイスしてくださることがある。

実践の場での在り方と、保育後に子どもの姿や自分のかわわりについて考えていく営みとの両方

が大切であることが、先生方の言葉からもよく伝わってくる。この両輪のバランスがとれて保育の実践が深まっていくのだと思われるが、それは根気のいる営みであることを感じる。それは、その人自身の、根元的で総合的なあり方（生き方）といったものにかかわっているからだと思う。

実践化・自覚化に向かつて

— 他者に開かれつつ考えていく営み —

このような難しい作業に学生を本気で向かわせてくれるきっかけになるのは、実習先の先生方からの言葉であることも多い。暖かい関係の中で、実践の場を共にする他者から、子どもの理解や、自分の在り方についての示唆を得られることの重要性を感じさせられる。それを手がかりに自分の意識や行動とのズレを探っていくことによって、自分を知り変革のきっかけを探っていくことが可

能になる面も大きいからである。そのためには、同時にそうした示唆を示唆として受け入れ考えていく、学生の側の他者に開かれつつ考えていく姿勢が必要であり、重要となってくる。

しかし、他の人の見方や意見を積極的に取り込んで自覚化し、具体的に自分にとっての次の課題を見いだし考えていくなどの自分を抜けていく営みを行うことは、容易なことではない。学生の中には、これまでの生

活の中で「そんなふうに言われたことがない」と言う者も見受けられ、受けとめきれずにむやみに落ち込んでしまったり、自信をなくしてしまい、他者へ自分



を聞いていくことに大きな抵抗感を感じる場合もでてくる。また、示唆を受けても、具体的にどう考えたらいいか見いだせずにそのままになってしまい、結局また同じことの繰り返しになってしまう様子も見受けられたりする。

そこで、実習前後の学生の個別の面接の際に、実習園の先生方からいただいた言葉を、共に考えあう時間を持つことも多い。学生が何う実習先も様々であり、実習巡回も専任の教員が手分けをして行うため、私自身はどのような実践が営まれていく場かなど、見えにくい中での手探りとなる。実習生へのアドバイスは、どのような先生方がおいでになり、どのような保育観や実習観をもっておられるかによって、違ってくると思われる。そこで、例えば「積極的に子どものかかわりを」というアドバイスなどに「学生自身が思い当たるところがあるか」と問いかけることから始めてい

く。本人としては、積極的にやってきたつもりであり、楽しかったという気持ちがある。その気持ちや学生の善さを受けとめつつ、実習中に体験した子どもの様子やそのときの自分のかかわりなどを具体的に例にして考えてみる中で、積極さをどこで考えていたかなどの自覚化を促してみたり、他にどのような方法があったのか考えあってみたりする。また、意識化したり記述したりすることに難しさを感じている場合には、同じように具体的ななかかわりをまず思い起こすことからはじめ、その中で学生の思いや感じていたことを探って言葉にしていく作業を共に行ってみたりする。養成校にいる私は、必要な学生にとっては、他に開かれつつ自分で考え続けていく営みを共に歩んでみる存在（他者）であることを基本としていたいと思っている。

同時に、授業の中では、実習中どのような子ど

もとのかわりがあり、そこから何を考えたかなどの事例を取り上げて紹介したり、学生同士が話し合ったりする時間も作っていつている。また、学生が保育者役や子ども役になって動いてみる時間なども作り、仲間の在り方や動きも体験していく場を持つようにもしている。同じ立場の仲間達が、どのように在るのか（具体的にどう行動したり考えたりするのか）知ったり、それを模したりしていく中で、学生が自分の在り方やかわりを振り返り、具体的に考えたり動いたりしていくための選択肢を増やしているように思われる。戸惑いや不安、喜び、課題などに共通性も大きい、それぞれに個性的な他者である仲間と出会い、そこに開かれていことも重要であると感じている。

おわりに

ここでは二つの事例を取り上げたが、保育の専

門家として育つときには、その人その人の個性が基本になり、そこから自分の課題を見だし、より成熟した人間・保育者として成長・変容していく様々なプロセスがあることを、いつも意識していたいと思っている。

そして、抱える課題はそれぞれであっても、子どもと共に暮らす者（それを目指す者）として、保育者としてよりよい存在でありたいと願う強い動機、他者に開かれている姿勢、その中で考え続けたたり試したりしてみる根気強さ、が大切のように感じる。その営みを起こし、支えていくためには具体的にどのような方法があるのか、今後も探っていきたいと思っている。

（新潟中央短期大学）